

海を越えて学ぶ京都

副理事長 富士谷 あつ子

京都生まれ京都育ちにとって、京都の魅力はかえってわかりにくい。季節の歩みも日々の暮らしも、決まったように過ぎて行く。戦禍を免れた古都ならではの言うべきだろうに、意識下に奔放さに憧れていた十代の頃には、京都はさえない町に見えた。私が京都の本当のすばらしさを分かるようになったのは、居所を変え、海を越えて来た人たちと交流する機会を持ってからのことであった。

三十代半ば一。アメリカから帰国する機内でのこと。配られた扇に描かれていたのは、琳派の梅や桜。金地に鮮やかな花を描いた小ぶりの扇を、当時は乗客へのサービスに配っていたのである。私が十代の頃から親しんで来た南宋画とは対極的な色彩の輝きが、そこにあった。京都の女性は、着物に描かれた光琳菊のまろやかな抽象の楽しさ、美しさに親しんで育っている。にもかかわらず、そのとき私が衝撃を受けたのは、海外で暮らしながら取材をしてみると、土地の人から逆に日本のことを話すように求められ、自分の知識不足を情けなく思っていたからだろう。日本のこと、京都のことを考えようと思いつくには、そんなきっかけが必要であったようだ。『京おんなの京』(白川書院)を上梓したのは、それから数年後のことであった。

先年、恩師の上田正昭先生に監修をお願いし、芳賀徹先生とご一緒に『京都学を学ぶ人のために』(世界思想社、2002)をまとめさせていただいた。今後、さらに多くの方がどのような京都学を披露されるか楽しみであるが、近ごろはその楽しみの中に海を越えて来た若い人たちの活動が目立つ。例えば、国際文化交流を進めるある団体のエッセイ・コンテストで入賞したポーランド人で京都大学大学院生のウオジツキ・シモンさんは、第二次世界大戦冒頭に他国の侵略を受けて以来の母国の受難を振り返り、京都の平和と自由をしみじみと語る。彼は今、当協会会員の方の町屋でアルバイトをしながら、数寄屋造りの研究を続けている。京都だけにはわからない京都学があると、つくづく思うこの頃である。

(ふじたにあつこ)

基調講演「水環境と生きものたち」

石田紀郎 (NPO市民環境研究所 代表理事)

京都の川で気になるのは保津川で、30年来カヌーで川下りをしてきた。20年ほど前から水が汚れ、中州で休憩しても水を汲んで湯を沸かす気がなくなってしまった。日吉ダムの影響で水量も減った。鴨川を見ているとある意味で不幸な川だと思う。川自体はおもしろいのだが、そこでなりわいをして生活の糧を得ている人がいない。

この15年間、アラル海という中央アジアの砂漠地域で仕事をしてきた。世界的に水飢饉の時代に入り、川と、水とどうつきあっていくか、水の賢い使い方が大問題となる。2025年には地球上の人口も現在の63億から80億に増加すると予想される。今の地球人口の30パーセントが増えると、飲み水が足りないだけでなく、食糧が足りない時代に入る。食糧生産の増大のためにも水が必要で、米1トンの生産に水1千トンがいる。インダス川、チグリス・ユーフラテス川など国際河川は水紛争の時代を迎える。

飲み水の問題で言えば、京都市民が飲んでいるのは100パーセント琵琶湖の水で、その水質が保持されていくか関心事である。ずっと琵琶湖の仕事をしてきて、今年は「20年目の琵琶湖調査団」を組んで報告書を作成した。琵琶湖の水質も20年ほど前より少しは良くなったが、湖底の泥の窒素成分は20年前の1.5倍に増加し、湖の富栄養化の方向が読みとれる。琵琶湖の漁業も昭和29年には3千〜4千トンの魚が獲れていたが、農薬や公害の問題が出た頃から1.5〜2千トンに減少した。さらにブラックバスやブラックギルの問題が追い打ちをかけている。琵琶湖は魚にとって非常に棲みにくいことになっている。イサザという魚を例にあげると、かつて年間500トンほど獲れた時代があったが、いまはほとんどいない。鮎寿司の鮎も減少し、もう寿司の価格も高価になってしまった。

琵琶湖は滋賀県の真ん中にあり、農薬や汚染物質の9割は湖に流入する。流域の農業、工業、商業、日常生活の結果が、全部この湖に反映する。滋賀県の農薬の使用量は全国の百分の一になっている。田の除草剤に使用される塩素系農薬に注目すると、1965年ぐらいに使用が開始され、大問題であることがわかり1996年には使用されなくなった。この農薬のCNP成分がイサザの体に溜まった濃度の分析を試みると、単純に農薬の使用量が増加するとイサザの体の濃度が増加するという相関関係は見えてとれない。

1970年代に圃場整備や耕地整備が進展し、入り組んだ小規模の水田が消失し、大規模に整然と区画された水田に整備された。その結果、昔なら山に降った降雨や村の排水も順々に田んぼに入って灌漑をし、最後に琵琶湖に流入していた。しかし、圃場整備が進み田んぼの環境が変わると、汚染物質が一直線に琵琶湖に入ってしまうことになり、琵琶湖の負荷量がうんと変わってくるようになった。肥料に含まれるチッソ、リンサン、カリも1980年代はじめ琵琶湖に赤潮を発生させ、京都の水は日本一かび臭いことになった。

水というものは同じように流れているように見えるが、自然界の中で巡回し、陸地の川の浄化作用に頼って生きていたのだ。水とつきあうということは、単に美味しい水が欲しいというだけでなく、われわれの陸上の生活を、社会を変えていくことであり、京都だけでなく世界中で考えなくてはいけない。

シンポジウム 「鴨川の生きものたち」

「溪流の要素と都市河川の要素」

久米直明 (聖母女学院短期大学教授)

ランドサットの衛星写真で京都盆地を見ると、ほとんどが鴨川の集水域である。その意味で鴨川というものに代表される何かを考えることで京都学というものになり立つかもしれない。

ちょっと天の邪鬼だが、鴨川を下流から上流へ向かって見ていけばどういふふうに見えるか。国道1号線や名神高速道路が川を渡るあたり、わりあいきれいで水遊びもできそう。竹田街道が交叉するあたりは殺風景だがヨシなどの植物は残っている。十條通りから陶化橋のあたりは河川改修の結果明るい雰囲気になっている。JR東海道線を越えいよいよ市街地らしい雰囲気が出てくる。五条大橋から北を見ると京都の鴨川の風情である。

丸太町橋のあたり河川敷が広く整備されている。今出川橋の北に出町公園があり、カメ石が置いてあって渡れるようになっている。もう少し上流へ行き北山橋を越え終野ダムを境に溪流的な要素が出てくる。貴船川の合流地点をさかのぼって鴨川の源流にいたる。

このように鴨川は100万人を超える都市を流れるにもかかわらず溪流的な要素と都市河川的な要素を併せ持っている全国的にも珍しい川である。溪流的というのは森林に涵養され、流れが速く、岩がごろごろして動物もたくさん棲んでいる。都市河川は排水や雨水が流れ込み、水量が多く流れがゆっくりして、堤防が住民の憩いの場となっている。

仙台の広瀬川や札幌の豊平川が似ているかもしれないが、鴨川はほとんど唯一、独特の特徴を併せ持った川と言える。そこのところに繰り広げられるドラマというものを中心に語ってあげば京都学というものになるのではないか。

「オオサンショウウオを

気軽にウォッチングしよう」

牧野達也 (鴨川の自然をばくむ会 会員)

オオサンショウウオを通して川を見ていて思うことを話してみたい。最近、天然記念物流行りで、本や動物フィギュアなど、いろんなものにとり上げられており、幻の生き物というわけでもない。とは言っても「ハンザキ」と呼ばれてまだまだ身近な生き物ではないという印象が残る。そこでオオサンショウウオのウォッチングをおすすめしたいと思う。京都市北区の雲ヶ畑の集落のすぐ横手を川が流れ、そこにオオサンショウウオが棲んでいる。専門家による生態観察の調査となると観察用具を背負って夜中じゅう川を歩き、見つけると体長の測定、手足の特徴、尻尾の模様や傷の有無等を記録する。

皆さんにお勧めするウォッチングは写真を撮って日時や場所を記録するだけである。今、必要なのは生きている環境をそのまま残していくことだと思います。もっと身近になってもらうためにも、家族や仲間、学校でぜひともやっていただきたいと、お気軽ウォッチングを紹介しました。

「キャンパスは鴨川、

テキストは水鳥・人・環境」

須川恒 (龍谷大学講師)

水鳥が生息している鴨川とはどういうものかを考え、生き物がなじむ都市づくりを探っていきたい。ユリカモメは都鳥と呼ばれたが、京都に昔からいたわけではなく、鴨川にやってきたのは1970年頃で、多い年に7,500羽くらいになった。10月頃、繁殖地のカムチャッカから2千何百キロを越えて冬を京都で過ごすためにやってくる。

マガモ、カルガモ、ヒドリガモなどカモも何種類かいるが、やはり鴨川にやってきたのはごく最近のことだ。1980年代の末ぐらいに、オナガガモが増え、ついでカルガモ、コガモ、コアシガモなどがどっと増え、文字どおりカモ川になった。

環境アセスメント実習で鴨川と高野川の20キロの環境、水鳥、人間の調査をした結果、ユリカモメやカモは上流に多かった。アオサギ、コサギ、ダイサギなどのサギ類は、カワウやカイツブリとともに下流に多いが上流にもいる。人間は散歩や運動、犬の散歩などが多いが、橋の下に住んでいる人もいる。環境は中州が残っているか、小川のような流れができ水草があって小魚やトンボなどの昆虫が飛んでいるか、川中に亀石がいくつあるか、ゴミ箱やベンチの数、バリアフリーになって歩きやすいかなどを観察した。要約すると下流はあまり金をかけていないのに比べ、上流はバリアフリーも進み公園化さ

れている。そして、公園化された上流は人が多く、同時にユリカモメやカモ類が多い。これは餌をやっている影響もあるが安全ということと関係があるかもしれない。人が多い場所に水鳥が多いことを生かして、環境教育の場として鴨川を利用できるのではないか。学校ビオトープで小さな池を作ったりしているが、鴨川をそういう場所にすればいい。「キャンパスは鴨川、テキストは水鳥・人・環境」を提唱したい。



6月例会のお知らせ

第3回 文化交流サロン(6月15日(水))(富田屋)
第3回 見学体験会(6月18日(土))(吉田山荘)
御参加をお待ちしています



「趣味は論ずべからず」とか申します。自分にとっては楽しい趣味も他人様の目にどう映っているかわかりません。今年も鮎漁が解禁となりました。鴨川や桂川にしても釣るのは上流かと思いますが、早朝の四条大橋を通るとその下で釣り糸を垂れているではありませんか。つい足を止めて覗きこんだりしますが、さして釣れている気配もないし、下半身水につかって楽しいだろうかと。私も10年以上も前になりますが、ラジオの早朝番組を担当していた頃、鴨川の鮎解禁日に合わせて四条大橋から少し下ったところに竿を持って入り、生放送したことがありました。初体験でしたが放送が始まって10分ぐらいたった頃に竿が大きくしなり、銀色に輝く鮎が釣れたのであります。喜びと共に鴨川が鮎の住む川であることの感動を語ったことでした。思えばその時の私の視線は竿の先の浮き一点で、橋の上から人が覗いていることなど思いもしませんでした。「趣味は論ずべからず」正にその人の世界です。

鴨川といえば賀茂川と高野川の合流点、出町の三角州からも生放送によく使わせていただきました。国際京都学協会の発足に伴い、昨年第1回のシンポジウム「京の川と歴史」の司会をさせていただきました多くのことを学びました。上流の話、下流の話、川と結びついたらしく、文化の話。京都を識るには鴨川から入っていくという手法に驚きつつ、今後の展開を楽しみにしている一人です。(たけべひろし)